

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00417

研究課題名(和文)「日本」を語るオリエンタリズムと「民話」のメディア展開 翻訳、方言、そしてアニメ

研究課題名(英文)On the influence of Orientalism on media development of "folk tales" in Japan

研究代表者

遠田 勝 (Toda, Masaru)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：60148484

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、ラフカディオ・ハーン等、明治期の英米系ジャパノロジストによって英語化された、日本の神話・伝説・物語などが、日本に逆輸入され、それら英語化された物語に潜む、リアリズムとサスペンスを基調とする近代西洋のナラティブと、オリエンタリズムに由来する異文化描写が、日本の「伝統的」物語の再生に取り組む作家や語り手たちに強い印象を与え、「民話」と呼ばれる、新しい地方の文芸の創出に関与したこと、さらには、戦後、「活字」メディアから「舞台・演劇」「漫画・アニメ」へと拡散するなかで、「近代西洋のナラティブ」と「異文化描写」が一定の役割を果たしていたことを論証したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ハーンの怪談で戦後もっともマルチメディア化の進んだ「耳なし芳一」、「雪女」を分析することで、民話と近代西洋のナラティブおよびオリエンタリズムとの関係の一端を明らかにし、また、近代民話劇の創始者であり『夕鶴』の作者である木下順二が失敗作として意図的に「埋没」させてしまった、書き下ろし歌舞伎台本「雪女」を取り上げ、その内容と成立過程を、第二次世界大戦後の「民話」のマルチメディア化の文脈のなかで検証し、その執筆と上演の背後に、木下のハーンへの強い対抗意識が見られることを指摘し、ハーンと木下が民話の近代化に果たした役割の相似性、および影響関係の可能性を指摘した。

研究成果の概要(英文)：Japanese myths, legends, and folk stories have been translated into English by European and American Japanologists since the late 19th century. These stories were later read by the Japanese themselves, either in English or in translation because of the realism of modern European literature and the exotic orientalism that was not found in the original stories. They made a strong impression on the young Japanese writers who tried to modernize their local stories and create new folk literature. This new type of story, called "minwa" (folk-tales) was enthusiastically welcomed by people, replacing the banned national myths after World War II. They soon spread from the print media such as books and magazines to theater, and anime on television, which had just begun broadcasting. In the invention of the "minwa" (folk-tales), we can see the contribution of Hearn and some other Japanologists to Japanese culture.

研究分野：比較文学・英語文学

キーワード：ラフカディオ・ハーン 木下順二 『夕鶴』 民話 民話劇

1. 研究開始当初の背景

本研究は、英米系知識人のオリエンタリズムが、近代日本の言説に及ぼした影響について、これまでに得た、4件の科学研究費補助金(基盤研究C)による研究の継続として構想された。すなわち、平成16～18年度「オリエンタリズムの比較研究」、平成21～23年度「明治期ジャパノロジーにおけるオリエンタリズムの明暗」、平成24～26年度「オリエンタリズムと近・現代における日本の『伝統的』物語の創出」、平成27～29年度「『日本』を語るオリエンタリズムの誕生と近代日本における「民話」の創出」の研究成果によって、日本の伝統的物語の「英語」による語り直しと、「方言」による語り直しには、なんらかの関連性を実証できると確信したことにより、本研究の着想に至ったのである。これまで報告者は、ハーン、チェンバレンなどジャパノロジストによる、日本の物語の英訳や翻案が、日本に逆輸入され、翻訳や教科書を通じて日本で広く知られるようになった物語に注目し、明治時代から第二次世界大戦終了後に至るまでに、それらがどのように日本語で語り直され、「民話」化されたかをさぐり、その研究成果を3冊の著書、『転生 する物語 小泉八雲と「怪談」の世界』2011(平成23)年、新曜社、『ハーンのまなざし 文体・受容・共鳴』所収「越境する「雪女」 白馬岳の雪女伝説と「民話」の近代化」(pp9-31)、2012(平成24) 熊本出版文化会館、『「コウベ・ミセラニ」終刊記念論集』所収「近代日本における「民話」の誕生 ラフカディオ・ハーン「貉」以後のノッペラボウ物語を中心に」2018(平成30)年3月、開文社出版、および7編の学術論文、2回の学会発表で公表した。

2. 研究の目的

本研究は、上述のような背景、準備研究をもとに、これまでの目標をさらに詳細に、さらに視野を広げて、追求しようというものである。すなわち、ラフカディオ・ハーンらの英語化された日本の伝説や物語に潜む、リアリズムとサスペンスを基調とする近代西洋のナラティブと、オリエンタリズムに由来する異文化描写が、日本の「伝統的」物語の再生に取り組む作家や語り手たちに影響を与え、「民話」と呼ばれる、新しい地方の口承文芸の創出に寄与したこと、さらには、その方言による地方の文芸活動が、戦後、禁圧された国民神話に代わる、安全な「懐旧」「愛郷」の物語として、一九五〇年代から爆発的に流行し、「活字」メディアから「舞台・演劇」「漫画・アニメ」へと拡散するなかで、「近代西洋のナラティブ」と「異文化描写」がどのような役割を果たしていたかを論証したものである。この研究課題の目的とは、村落共同体において遠い昔から口承により伝えられてきたと信じられていた「民話」の一部が、実際には、近代西洋のナラティブと異文化を語るためのオリエンタリズムという芸術形式に由来し、出版やテレビといった近代のマスメディアとも結びついていたことを実証的に論証することである。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究では、近年の人文学において多くの成果を産み出した学術概念、たとえば「伝統の創出」「ナラティブ論」「オリエンタリズム」「メディアの越境」などを用いて、一八七〇年代から一九七〇年代までのほぼ百年にわたる長いスパンのなかで、「民話」の創出という、英語文学と日本語文学の交流現象を考察する。「民話」の研究は従来、文化人類学、民俗学、説話・神話研究などの学術分野内でおこなわれ、上記のような概念を複数組み合わせた研究は少なく、それらを戦後の日本の「民話」ブーム、とりわけそのマルチメディア的展開の分析に応用した研究は前例に乏しい。ここに本研究の独自性と創造性がある。本研究では、戦後の「民話」のさまざまなメディアへの展開を中心に考察した。日本の伝統的物語の近代化として「創出」された「民話」は、第二次世界大戦後、国家主義的・愛国主義的物語が禁圧された空虚をうめるかのように、安心して読める懐旧・愛郷の物語として、一九五〇年代から七〇年代までの読書界を席卷した。地方や都道府県別の民話全集が次々と出版され、それらのほとんどが数十万部を売るベストセラーになった。教育界でも民話は、誇るべき郷土の口承遺産として、小中学校の国語教科書に採録された。劇作家で英文学者、またハーン研究者でもあった木下順二は、あらたに「民話劇」という芸術ジャンルを提唱し、みづから執筆・上演した『夕鶴』は、佐渡地方に伝わる単純な異類婚姻譚に、痛烈な資本主義批判を盛りこみ、なおかつ、美しい郷土、懐かしい昔の物語として人気を博した。こうした「民話劇」は、学校・公民館で児童や労働者により演じられることで、民話の大衆的人気と規範的地位は、さらに高まっていった。その木下順二を中心に設立された「民話の会」には、後に戦後の民話研究と童話文学の世界をリードする松谷みよ子がいた。松谷は、長野県安曇野で取材したという民話を『信濃の民話』として出版し、地方の名を冠した民話集のベストセラー化の嚆矢となるが、この本に収録された「雪女」は、実は現地での聞き取り調査で採集したものではなくて、松谷が机上でハーン「雪女」をもとに、「信濃っぽい」方言や衣装、仕草を書き加えて、自由にアレンジしたものであったことは本研究以前の論文で指摘したとおりである。こうして近代西洋のナラティブを取り入れ、近代西洋への批判的視座や、過去や辺境への憧憬を、エキゾチックな方言と仕草・衣装でくるみこむ、オリエンタリズム的「語り」が、民話の正統的な「語り」となっていったのである。民話のマルチメディア化は、

一九七〇年代半ばから九〇年代半ばまで放映されたテレビ・アニメ『まんが日本昔ばなし』で頂点を迎える。ここに使われた人工的な方言と、人物・風景の単純な描線と色彩によるデフォルメ、世界の民族音楽を効果音や主題歌に取り入れる技法、現代社会への批判的視座は、明治のジャパノロジストらが創始した「日本」を語るオリエンタリズムの最終的な進化的形態とも見なすこともできる。今日わたしたちの記憶のなかにある「伝統的物語」は、この二十年にわたりテレビで放映されたアニメ番組やそれと同種のテレビ番組に負うところがきわめて大きい。このように具体的作品の様々なメディアへの展開を追うことで、わたしたちが日常的に愛着する「郷土」や「昔」の物語の組成が解明され、より広い文化的視点、より根源的な歴史的視点から、わたしたちの国土・郷土への「愛情」や「信仰」という感情と、「物語」の深いつながりを考察した点に本研究の方法面での独自性がある。

4. 研究成果

本研究は、「民話」が第二次世界大戦前後から、地方の口承文芸からナショナルな出版物へ、そして国語教科書、舞台、テレビ・アニメ童話、映画へと、ジャンルやメディアを超えて拡大発展するなかで、近代西洋ナラティブと異国情緒を語るオリエンタリズムが、どのような影響を与えていたか多面的に考察したものである。2018年度は、この研究の枠組みにもっともよく適合するラフカディオ・ハーンの「耳なし芳一」をとりあげ、学術論文として「オリエンタリズムと「民話」のメディア展開——Lafcadio HearnのThe Story of Mimi-Nashi-Hoichiを例として」を、2018年12月『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』第51号(pp.1-18)に発表した。「耳なし芳一」は、ハーンの代表的傑作であり、現在では国民的伝説といえるほど著名な物語であるが、実はハーン以前にはそれほど流布しておらず、ハーン以後においても、口承物語としては、民話作家たちには、あまり人気がなく、再話や採話されることも多くはなかった。本論文で論証したように、その少数の例外的な「口承」とされる物語も、ほとんどはハーンの翻訳を、きわめて粗雑な形で方言によって「語り直した」か、「書き直した」ものであった。ハーンのもう一つの傑作「雪女」の多様な民話化と土着化、口承化に比べると、その展開の乏しさは印象的である。本論文では、「耳なし芳一」の民話化、口承化をばんだ要因を考察し、その第一の原因は、この物語の伝承がハーン以前のある段階から、いくつかの地名や人名と切り離せなくなっていたことにあると結論した。物語の口承・民話化には、多くの場合、地名や人名の改変によるローカライズが必要なのだが、それができなくなっていたのである。しかし、ハーンの傑出したナラティブとオリエンタリズムによるエキゾチックな情景描写、怪異の聴覚と視覚と触覚を個別に用いた、近代的リアリズムによる再現は、ローカライズの不能という制約を超えて、ローカライズにはこだわらない次の芸術的展開、すなわち、テレビ・アニメや映画では素直に歓迎された。この時点で「耳なし芳一」は新時代の新メディアにおいて、「雪女」と同等に愛好されるようになった。「耳なし芳一」の高い人気と知名度は、「口承物語」といって土着化の進んだ「雪女」とは異なり、むしろ、この現代における多面的なメディア展開に負うところが大きいのである。

本研究の目的は上述したように、民話と近代西洋のナラティブおよびオリエンタリズムとの関係について、戦後の「民話」のさまざまなメディアへの展開を中心に多面的に考察することであるが、物語に地方的な方言や衣装、仕草を組み込むこと、いかにして「地方っぽくみせるか」というアレンジの手法は、テレビ・アニメ化された「日本昔ばなし」で頂点を迎える。このテレビ・アニメ化まで視野に入れたハーン論の試みとして、報告者は、「外国人が語る日本の怪——小泉八雲『怪談』の世界」と題した講演を令和元(2019)年6月28日、大阪大学中之島センターにおいて実施した。この講演においては、ハーンの「雪女」の独自性と魅力が、日本の地方の土着の民話として語り直され、それがまた、現代の映画やアニメにどのように伝えられたかを考察しながら、それとは別系統の大阪の伝説である信太の森の「葛の葉物語」および木下順二の『夕鶴』により国民的物語となった「鶴女房」の説話との比較から、「雪女」の特長を考えた。これら類話との比較により「雪女」の根底にある西洋文学の伝統と、幼年期に生き別れになった母親への思いを重ね合わせることで、ハーンの「雪女」がもつ、重層的で多様な意味を読み解いた。そして、この「雪女」という、二十世紀はじめに創作された新時代の「怪」を、この講座全体のテーマである「日本の『怪』」のなかに、どのように位置づけ、どのように評価したらいいのかを考察した。

つづいて、2020年度、学術論文として「『雪女』から『夕鶴』へ——近代民話におけるラフカディオ・ハーンと木下順二の役割」(神戸大学近代発行会『近代』(第121号、2020年6月))を執筆した。日本における「民話劇」の創始者であり、民話劇『夕鶴』の執筆者である木下順二とハーンの関係について、伝記的考証のみならず、「雪女」と『夕鶴』の比較論・作品論によって解明を試みた論文である。劇作家で英文学者・評論家でもあった木下順二は、あらたに「民話劇」という芸術ジャンルを提唱し、みずから執筆・上演した『夕鶴』は、佐渡地方に伝わる単純な異類婚姻譚に、資本主義批判を盛りこみ、なおかつ、美しい郷土、懐かしい昔の物語として人気を博した。木下とハーンにはいくつものつながりがあるが、おもに両者の政治的思想的スタンスの違いが原因となって、両者の関係が主要作品の類似性・相似性として本格的に論じられることはなかった。本研究では、木下順二が失敗作として、意図的に「埋没」させてしまった、書き下ろし歌舞伎台本「雪女」の内容と成立過程を検証し、その執筆と上演に、木下のハーンへの強い対抗意識が見られることを指摘し、ハーンと木下が民話の近代化に果たした役割の相似性、およ

び影響関係の可能性を指摘した。また同時に本論文では、民話に採用された近代西洋ナラティブが、戦後日本の民話劇と伝統演劇である歌舞伎にどのように浸透したかも考察した。木下順二の登場をもってはじまる「民話」の爆発的流行の中で、近代への批判的視座や、過去や辺境への憧憬を、エキゾチックな方言と仕草・衣装でくるみこむ、オリエンタリズム的「語り」の技法は、さまざまなメディアのなかで採用されていった。こうした事例を検討することで、明治のジャパノロジストらが創始した「日本」を語るオリエンタリズム的語と、民話という近代日本の「郷土」や「昔」を語る文学とのつながりの一部が、解明されたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 遠田勝	4. 巻 121
2. 論文標題 「雪女」から『夕鶴』へ - 近代民話におけるラフカディオ・ハーンと木下順二の役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸大学近代発行会『近代』	6. 最初と最後の頁 39-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠田勝	4. 巻 51
2. 論文標題 オリエンタリズムと「日本」を語る「民話」のメディア展開：Lafcadio Hearnの"The Story of Mimi-Nashi-Hoichi"を例として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 遠田勝
2. 発表標題 外国人が語る日本の怪 小泉八雲『怪談』の世界
3. 学会等名 懐徳堂（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------